明石の史跡（８７）明石津合戦

中世の明石を舞台にした合戦のなかで、もっとも著名なのが、嘉吉の乱（嘉吉元年＝１４４１）である。将軍義教を殺害した播磨守護の赤松満祐追討軍の明石乱入であるといわれる。追討軍の指揮官（細川持常）が発布した感状（かんじょう＝合戦に参加した将士の戦功を賞する文書＝岩波日本史辞典）をみれば、蟹坂（和坂）・人丸塚（現在の明石城の本丸附近）が主戦場になっていることがわかる（拙稿「中世の泊と松江」『戦乱に揺れた明石』２４７－８頁。以下とくに出典を明記しない場合は同書による）。

あれから７年を経過した文安５年（１４４８）の８月、淡路国の三沢小次郎朝経は、妙勝寺（淡路市東浦町）に田１段を寄進する。これには、毎月の晦日、一族集まって、法華経の寿量品の一品（一章）の読誦が義務づけられていた。朝経をしてこのような寄進行為にかりたてたものは、３年前の父義円の死である。彼が討死した場所こそは明石津であった（「妙勝寺文書」『兵庫県史史料編』中世１．５２３－４頁）。　日々に強まる新守護山名の圧力。赤松満政（則祐の孫）は、教康（満祐の子）とともに、隠遁という理由で、将軍家の許可なく、播磨に下国するのが、文安元年（１４４４）の１０月２５日の夜であった。翌１１月２８日、追討軍（山名持豊）が但馬にむけて出京。１２月２０日の但馬口合戦で、播州動乱が始まる。

文安２年（１４４５）２月晦日、明石津を舞台に激戦が展開される。明石の経済の支柱である「津」（明石川河口部）は、大きな影響を受ける。合戦の２か月半の後、明石船籍の船が、ひさびさに兵庫に姿を現す。この間、２キロ西の松江船籍の船の兵庫入港は、７回を数えることからも、合戦の被害のほどが、推し量られよう。

日本歴史学会会員　　茨木　一成

明石川河口